



NPO法人 日本レスキュー協会

〒664-0833 伊丹市下河原 2-2-13

TEL: 072-770-4900

FAX: 072-770-4950

e-mail: info@japan-rescue.com

●セラピードッグ派遣について

セラピーの訪問先は高齢者施設だけに限らず、児童福祉施設、知的障害者、身体障害者施設などですが、保育所から高等学校までの学校にも小さな命を大切にする気持ちを育めるよう、情操教育の一環としてセラピードッグの派遣を行っています。

●セラピードッグ

日本レスキュー協会のセラピードッグとは、犬との交流を通じて、対象者のQOL（生活の質、すなわちある人がどれだけ人間らしい望み通りの生活を送ることが出来ているか）を高める目的で養成されている犬たちのことです。

派遣先の施設などでの衛生面に関しては、狂犬病予防、予防接種はもちろんのこと、セラピー前日にはシャンプーし、歯磨きや歯石とり、耳や目の掃除など全身のチェックを行います。

セラピードッグ1頭に対して1人のトレーナーが付き、事故を起こさぬよう細心の注意をはらっていますが、万が一の場合を考え傷害保険にも加入しております。

●セラピードッグ効果

日本レスキュー協会のセラピードッグの活動は、心のケアを目的としたふれあいだけに留まらず、個別でまたはグループなどで対象者にあったプログラムを組み、アプローチしていくものです。

目標

＜身体面＞リハビリテーションを必要とされる方や筋力低下が見られる方などに、セラピードッグとの遊びを楽しみながら意識を持ち手足を動かすこと。

＜心理面＞情緒の安定や、達成感、充実感を味わい自信につなげること。

＜社会面＞他者を意識し、発語や会話の増加などを目標にします。

セラピードッグを介在することで、対象者の意識が明確になり、楽しみながらプログラムに参加していただける利点が生れます。

ドックセラピーの効果は対象者だけではなく、周りにいる施設のスタッフやご家族にも現れます。普段意思表示の少ない対象者が満面の笑みでセラピードッグとふれあう姿を見て周りの方の顔もほころび一体感を感じ、交流も生まれます。

また、高齢者の場合、セラピードッグとの関わりの中では、ほとんどの対象者がセラピードッグとのプログラムに集中し、トイレに立ち上がる方や失禁者の割合も少なくなるといった状況です。

さらに、通常のリハビリテーションなどでは「させられている」という意識から面倒がる方でも、セラピードッグと一緒に、自ら積極的に活動に参加し、それが、残存機能の維持などに役立つのではないかと考えています。

このようにセラピードッグとの交流が、より効果的な結果につながることを願い、老人性痴呆症患者に対し効果検証を行い、平成14年の世界精神医学会横浜大会などでも発表を行っています。

犬や猫のアレルギーについて、インターネットで調べてみました。

～犬や猫から動物アレルギーになるの？～

さて、猫や犬からアレルギーになるのでしょうか？

「アレルギーになる！」という医者もいれば「アレルギーにならない！」という医者もいます。

一概には言えないのが現状ですが一般的に「アレルギーの原因になる」と信じられているようです。

その考えを打ち破る情報を見つけました。

頭から動物を敵視せず、様々な視点から判断してください。

☆猫のせいで赤ちゃんがアレルギーになる？

もともとアレルギー体質でないのに、猫のせいでアレルギーになることはありません。

逆に新生児のうちから猫が身近にいた子供の方が、猫が原因のアレルギーになることが少ないとも言われています。

アレルギーとは、生体に進入した異物を攻撃する機能が過敏に働きすぎて体に影響を与えることをいいます。

人間の子供の場合は、このメカニズムを確立するまでには、生まれてからしばらくかかります。では、免疫がないから危険だと思うでしょうが、それ以前に新生児の体は異物を認識することがまだできません。

猫の抗原が生まれたときからあれば、異物として認識されず、逆にアレルギーになりにくいというわけです。（「Hrlllo Nyanko!!」より）

☆猫がアレルギーとなることはさほど多くない

(東京都獣医医師会・編著『猫と暮らす本』より)

『喘息や、アレルギー性皮膚炎の子供を持つ母親から、猫や犬を飼ってはいけないといわれたからこの猫(犬)を処分したい、といった相談を受けることがあります。アレルギーは動物を飼育しているとその動物に原因ありとされやすいのですが、動物の毛やフケがアレルギーとなることはさほど多いことではありません。

アレルギーとなりうるものには、食物はもちろん、ハウスダスト・カビ・ダニ・花粉、あるいは工場煤煙や紫外線に至るまで生活環境内にあるすべてといってよいほどのものがあります。

その一部犬や猫のフケが含まれるのです。

確かに犬や猫を抱くと、目がかゆくなって涙がでたり鼻水がでるとか、喘息のやアレルギー性皮膚炎の子供が動物を飼育することによって精神的な安定や充実感を得て発作の防止につながることも見逃せません。

子供が発育していくときの、安定した精神的な環境づくりのために、動物のいる生活環境についても考えてみてはどうでしょうか。』

アレルギーの症状は個人差が激しいので、アレルギーをお持ちの方は犬・猫を触らないのが賢明です。

散歩などに出た際、毛に付着する花粉なども重なってアレルギー反応を起こす場合もあるので、散歩から帰ると喚起をよくし、ブラッシングなどを行い付着した花粉などを振り払いましょう。